

【学生フォーラム】

ものづくりが生きるまち～西三河の伝統産業と地域活性化～

西三河グリーンマップ / 人間環境大学ものづくり研究会 佐浦重明

【要旨】

われわれ西三河 GM 人間環境大学ものづくり研究会は、西三河の 12 市町の伝統的ものづくりを対象として取材を行っている。実際に現地を訪れて、伝統的なものづくりにたずさわる職人さんや業者の方々に直接お話をうかがい、ものづくりの現場と作業を見せていただくだけでなく、関連する場所や施設をたずね、資料を収集して、ウェブサイトをつくる。こうした活動のなかで学んだことのひとつは、ものづくりを支える地域間ネットワークの存在である。それを再発見し、活用していくことが、地域の活性化に結びつくのではないだろうか。

1. 紹介

まず我々の活動について概要を述べたい。

(1) グリーンマップ

グリーンマップ(以下 GM)は、地図作成を通して地域を再認識するツールであり、ニューヨークで考案され、世界的に普及しつつある。地域住民が自分の住む町の魅力や問題点を発見し、それを世界共通のアイコン(絵文字)を使って表示し、独自の地域マップを作っていくのである。

西三河グリーンマップ(以下西三河 GM)は、この世界的な GM システムを採用した地域マップづくりの運動であり、西三河の 12 市町からなるエリアを対象としている。

(2) 西三河グリーンマップ

西三河 GM というプロジェクトは、高浜、碧南、西尾、一色、吉良、幡豆、幸田、額田、岡崎、安城、知立、刈谷の 12 市町を主体(実行委員会)としている。目指すものは西三河の地域資産の再発見・発信を通じた活性化であり、そのためにグリーンマップというツールを採用している。マップメーカー(GM 作成の責任者)は、人間環境大学の青井哲人助教授であり、事務局は岡崎商工会議所が、また情報発信のためのウェブ作成は民間企業が担当している。

(3) 人間環境大学ものづくり研究会

人間環境大学ものづくり研究会(以下もの研)は、マップメーカー(青井)と学生 6 名で構成され、学生が主体となって活動をしている。

我々の仕事は、地図上にアイコンを並べる一般的な GM のスタイルでは表現しきれない、より生き生きとした情報を収集・蓄積・発信するために、西三河のものづくりに着目して取材活動を行うことである。各市町で伝統的なものづくりにたずさわる職人さんや業者の方々を取材し、その情報を整理してウェブサイト上で公開するための原稿を作成する。取材では、必ず現地に足を運び、現場で直接お話をうかがうとともに、関連する場所や施設をたずね資料収集も行っている。

情報発信の方法としては、ウェブサイトの他に、愛知万博会場でパネルの展示と、来場客に土人形に絵付けをしてもらう体験型のワークショップを企画している。

2. 活動報告

(1) 高浜取材

我々もの研は、これまでに一色町は佐久島の船大工、高浜は瓦産業、碧南は土人形、西尾は抹茶、吉良は海苔といった内容で取材活動をしてきたが、今回はその中でも高浜の回を取り上げて紹介する。

高浜は三州瓦の最大の産地として有名であるため、瓦について取材することになった。そのバックボーンだが、瓦作りが盛んになる要因である瓦に適した土が、矢作川流域から大量にとれたこと、そして三河湾から大型船で江戸などへ運ぶという流通面の利点もあったことを挙げることができる。こうした地の利を生かした高浜三州の生産は、遅くとも18世紀前半には行われていたことがわかっており、現在では三州瓦は全国の瓦工業のなかで最大のシェアを誇る。

高浜第一回目の調査では鬼瓦に焦点を絞った。鬼瓦は瓦の種類のひとつで、棧瓦のような大量生産されるものとは違って、熟練を要する、半ば芸術的な造形作品である。

(2) 「丸市」

さて、取材日に我々がはじめに向かったのは、「丸市」という鬼瓦の工房である。お話をしてくださったのは二代目の加藤元彦さんだ。鬼瓦を専門に作る職人のことを「鬼師」もしくは「鬼板師」と呼ぶ。現在、高浜市には19人の鬼師がいるということだが、そのうち手仕事だけで鬼瓦をつくることのできるのは、加藤さんを含めて5人しかいない。

おそらく、「鬼師」や「鬼板師」という職人については、一般には必ずしも知られていないだろう。さらに言えば、型を使わずに手仕事だけで鬼瓦をつくることのできる職人が全盛期にはその数倍もいたということからも、現在鬼瓦の置かれている状況を察することができる。船大工や土人形でも同様で、こういった伝統的なものづくりは後継者や経営など非常に厳しい問題を抱えている。

しかしながら、そこに光る技術は多くある。それは、取材を通して我々にも十分にうかがうことができた。それは当然作品に表れてくる。数ある鬼瓦のなかでも、加藤さんが得意としているのは鯨の鬼瓦である。鯨の良し悪しは、鱗の出来栄によって決まると言う。躍動感のある鱗を掘る工程が一番の腕の見せ所なのだそう。それから、高浜の駅前広場のシンボルになっている巨大な鬼瓦も、加藤さんの作品である。一度見に行くことで、その生の迫力を感じることができるだろう。



写真1：加藤さんの鬼瓦

(3) 「鬼源」

つづいてうかがったのは神谷博基さんの工房「鬼源」だ。神谷さんは「鬼源」の三代目

で、型を使わずに鬼瓦をつくることができる数少ない職人さんの一人である。

「鬼源」は、かつては一般的だった伝統的な工房を今も使い続けている。天井は低く、床は土が露出している。土の床は水分が含まれているため、工房内の湿気を保ち、瓦の土の乾燥を防ぐ役割がある。今は少なくなったこうした工房から数々の銘作が誕生していったのである。

神谷さんが得意とするのは「影盛」と呼ばれる鬼瓦である。「影盛」は左右対称の幾何学的外観をもち、その内側の装飾に施された菊が特徴的である。菊の造形には、非常に繊細な細工が要求され、人の手でしか表現できないという。それを可能にしているのが職人の腕なのだ。地味ではあるが、最も優れた技術がここにはあるように思えた。

3. 地域ネットワークの発見

(1) ものづくりネットワークの例

取材活動を通してみえてきたのは、ものづくりを支える地域のネットワークである。

具体的な例を紹介しよう。2で紹介した高浜の瓦と、地元では「おぼこ」として親しまれる碧南の土人形には、おなじ矢作川がつくりだした粘土が使われていた。またおぼこには人形をつくるための型があるが、その原型を、鬼師が製作し提供する関係があったことは、我々には非常に興味深く感じられた。

このように、つくるものや場所は違って、その地域の資源や技術者が共有されていることは、ものづくりの世界ではいたるところにみられるのだ。他にも、抹茶をひくための茶臼に岡崎でとれる御影石が使われていたり、碧南の醤油やみりんなどの醸造系の絞りかすが、抹茶の原料であるてん茶栽培の肥料に使われていたり、佐久島の木造船に額田の杉が使われていたということも、取材を通して聞くことができた。

こうしてみると、矢作川の果たした役割がみえてくるのではないだろうか。矢作川は西三河の重要な流通経路としても利用されていた。このことも含め、矢作川がつくりだした環境は、ものづくりを支えるいくつもの小さなネットワークを生み出すとともに、原材料の供給や製品の流通という面では西三河と他の地域とをつなぐ大きなネットワークの窓口にもなったと考えられる。こういった大と小のネットワークが、西三河の伝統産業を支えてきたのではないだろうか。



写真2：碧南の「おぼこ」

(2) 西三河 GM の意義

我々はものづくりを支えている様々な具体的な関係から、多くのことを学ぶことができた。例えば、土という天然資源、矢作川という流通経路、鬼師という技術者、これら“財”の共有ネットワークを知ることができたのだ。現代でもネットワークは重要なものであるから、ネットワークを再考し、その可能性を模索していくことには十分価値があるように思える。西三河の伝統産業にみられたように、地域の特質、人、技術などのつながりを再発見していくことが、地域全体の活性化につながるのではないかと考える。

我々の活動は、こういったつながりの重要性を“みせる”ということによって伝えていくことができる。そういった点にも活動の意義があるだろう。